

第1部 基調講演

「みえの子ども白書」からみえてくること ...いっしょに考える

神戸学院大学教授 佐々木光明

みなさん、こんにちは。ご紹介いただいた佐々木です。神戸学院大学で法律・刑事法を勉強しています。神戸学院に行く前は、三重短大におりました。三重の地で初めて就職して、いろんな方々に支えられて勉強を続けてくることができました。私にとって三重の地はとても大事な地です。私はこの三重の地で育ててもらったという気がしております。ですから、今日お話ができる機会を与えていただけてとても感謝をしています。今日は日頃勉強しながら感じていることをお話させていただければと思います。

まずは三重県子ども条例の紹介をさせていただきます。この条例は、誇っていいと思います。今、自治体でたくさん条例が出来ていますが、この条例はとても丁寧に作られました。条例の起草に関わった委員の人たちが、言葉ひとつひとつを探るように、「子どもたちにこの言葉は届くだろうか」と、真剣に議論をした条例です。さらに、子どもたちからさまざまな意見を聴いてそれを吸い上げながら条例に反映させようと、子どもの声をきちんと聞きながら作った条例でもあります。そういう意味で、丁寧さにおいては他のどこの自治体の条例にも負けないと思います。

また、子どもの実情をきちんと知ってから条例を活かそうという姿勢も、実は三重県が最初だと思います。これはとても大事な姿勢です。子どもの声を活かすということにおいては、やはり三重県は先進県だと思います。この条例は、子どもたちを元気にしよう、あるいは子どもと関わる大人たちを元気づける後押しするため、「こんなことが大切ですよ」、そんなメッセージが盛り込まれたものなのです。これから子どもや大人と一緒に三重をつくっていくための大事な出発点、それがこの子ども条例だと思っています。

知事さんのメッセージとみえの子ども白書

今日はこの子ども条例、みえの子ども白書、子どもの実情をふまえながら、改めて何が大事なポイントなのか、ということを考えていきたいと思います。

タイトルとしてレジュメに、「いっしょに考える」と書きました。子どもとともに考える、大人同士で考える、あるいは親と子が、大人と子どもが、さまざまな形で一緒に考えるきっかけを作ればと思っています。

子ども条例の中で大事なことを、実は知事さんが白書の巻頭言の中で書いています。私たちの条例作りのなかで大事なポイントを押さえてくれています。「私は、子どもが自分らしくいきいきと育つために

は、子ども自身が自分を大切な存在だと信じていることができる～」。自分を大切な存在だと信じられることが大切だ、このことはとても重要なことです。さらには、その子どもが持っている可能性などを大人が引き出すこともとても大事だということがちゃんと述べられています。今日のお話のポイントはここに尽きます。

今日の課題ですけれども、子ども白書の実情に基づきながら、私たち子どもに関わる大人にとって、あるいは子どもにとって、何が大事なことなのかということを考えてみたいと思います。

このことについては、パンフレットに、実は、結論めいたことが書いてあるんですね。さきほど知事も紹介していただきましたが、子どもが「自分のことが好きだ」という割合が、小学生のときよりも中学生になると低くなっているということが紹介されています。さらには、「子どもは自分のことが好きだ」と思っている親は、小学校のときも中学校のときも、あまり変わらない。実は親が思っている子ども像と、子どもが思っていることとはずいぶんギャップがあるということが指摘されています。これを「さあ大変だ、大人の感覚と子どもの感覚がずいぶん違うがそれでいいのか」というように考えられますが、もうちょっと引いて考えてみたいと思います。子どもの思っていることと大人の思っていることを縮めるということ、さあどんな対策を立てるかということよりも、大人と子ども、親と子どもの関わりの原則って何かということを変更してここで考えておきたいと思います。

みなさんのお手元の概要版で、一番左のところには、子どもの実情が書いてあります。そして左下のところを見ていただければと思います。子どもが自分のことを好きと思うか、さきほど紹介した数字ですが、子どもの小学校5年生の「自分が好きだ」という割合が63%、中学校2年生になると43%、減っていくんですね。自己肯定感が低くなっているというふうにも言われま

すが、大人のほうは、小学校5年生の親御さんは、「きっと自分の子どもは自分のことが好きだと思う」94.6%、中学校2年生になっても、88.6%。大人のほうは、「きっと子どもは自分のことを大切に思っているはずだ」と思っています。

さらにこの右隣のところを見ると、「自分のことを決めるのに大人は意見を聞いてくれるか」で、「よく大人は聞いてくれる」と答えた子どもの中で、「自分のことが好き」という割合は、ずいぶん高くなっています。つまり、「大人は自分の話を聞いてくれる」と思っている子は自分のことを肯定的に受けとめていることが分かります。「大人が十分に聞いてくれない」と思っている子は、自分のことを肯定的に受けとめきれない子が多いということがこの数字からわかります。

さらには、概要版の一番右下のところに、大人からの愛情と地域への愛着、というところがあります。「生活のなかで大切にされていると感じるか」、「地域の大人やいろんな人たちから大切にされていると感じるか」、「感じる」という子どもは、自分の地域に住みたい、自分の地域を大事にしたい、という割合が高くなっていて、自分が地域のなかで大切にされていると感じていない子は、地域の中にあっても地域に愛着を感じていないことが分かります。

こうやってこの数字を見ていくと、あることが分かります。この子ども白書で縷々出てくる数字から考えるべきことは大人問題、社会の中の大人の側が抱えている問題なんだろうと思います。その意味で、私たち大人が、この白書の中から何を読み取るのかということがとても大事です。子どもと大人の実情が、この子ども白書の中に出てきますけれども、大人の持っている問題点を改めて考えてみるきっかけにする大事な出発点という気がします。

大人と子どもの関わりの原則を考えるのが今日の課題だとお話しましたが、こんな経験がありました。NHKのラジオ番組で子育て相談があります。小学2年生のこ

んなお母さんがいました。「うちの子は小学生にもなって、何かうまくいかなかったり、物が欲しかったりすると、子どもみたいにええ～んと泣くんです。これでいいんでしょうか？」という質問でした。回答者の方が、「それでどうされるんですか？」と言うと、「もう子どもじゃないんだからしっかりしなさい。ええ～んて泣くんじゃありませんと叱ります。」と答えました。

実は私も、「これでいいんでしょうか？」という質問を、たくさん受けたことがあります。例えば、「うちの子、女の子ばかり気にするんです。ちっとも勉強しないんです。これでいいんでしょうか？」高校生の男の子の親からは「勉強をちっともしない代わりに、毎朝鏡の前で髪の毛ばっかりいじっているんです。学生服の下からでてるTシャツの色を決めるのに、何十分もかかるんです。これでいいんでしょうか？」こういう声がよくあります。

ラジオの回答者は「髪の毛の乱れは心の乱れ。服装の乱れは心の乱れ。お母さん、気を付けましょう。」と言いました。この言葉を聞いて、今どき珍しい回答だなと思いました。「これでいいんでしょうか？」と訊いてくるお父さんやお母さんの気持ちは良く解りますが、その回答を聞いて安心するんでしょうかね。「髪の毛の乱れは心の乱れ、心の乱れは非行の始まり。」と答えた人は、きっと何かの組織をまとめなくちゃいけない管理職の方かなと思いました。

もともと「心」というのは、はっとしたり、どきどきしたり、びくびくっとしたりするもので、心って乱れやすいものなんです。「心の乱れ、気を付けましょう」と言って組織を管理する方が好きなのは、規律だとか秩序だとかそういう言葉だと思います。そういう言葉ってカチカチとして、四角い塊の中に納まっているんですね。ですから、「心の乱れに気を付けましょう」というのは、「心やめましょう」と言われているみたいで、私はとても不安になりました。

「こういう子ども、どうなんでしょうか？」と聞いてくる親は、「それ問題です

よね、だからこうしましょう。」と言ってもらえると安心してしまう。大人もやっぱり誰かに訊いて安心したい、許可をもらって安心したいというところがあるのかもしれない。私たちの社会は、いろんなものを認可されたり許可されたりしながら進めていく社会で、それを反映して、親の気持ちにも表れるのかもしれないと思いました。親も自信を持ってない、子どもも自信を持ってない、そんな状況下で私たちは子どもや親と関わっているという現実をきちんと受けとめるということも必要なのかもしれない。

でもよく考えてみれば、最後に大人は伝家の宝刀を抜くんですよね。「子どものくせに。子どもなんだから。」と言っておきながら、さっきのお母さんみたいに、「もう子どもじゃないんだから。」と急に態度が変わります。大人はいつでも伝家の宝刀を抜いて、ばっさり子どものことを切っちゃうという現実が一方であるんだと思います。ですから、みえの子ども白書を見て、大人と子どもの間では、大人問題がやっぱり厄介なんだという気がいたします。

しかし、厄介だといって済ませるわけにはいきません。その大人と子どもの関わりのある方の大事な原則って何なのか、ということを確認しておくことはとても大事です。これを考えるにあたって、私が経験したことをお話します。

最近私は、大学にある方を呼ぶことができました。カーティス・マッカーシーさんという方で、アメリカのオクラホマ州の死刑囚でした。20年間、死刑囚として刑務所で過ごしました。しかし、イノセンス・プロジェクト、無実を発見するプロジェクトによって、彼は無実が明らかになり、2007年に社会に帰ってきました。この方のいろんなお話しの中かでとても印象に残ったことがあります。それは「私は20年間、実は我慢できた。希望を捨てなかった。」と言ったんですね。彼は「なぜ希望を捨てなかったのか、それは、生きる権利をき

と守ってもらえる、法律はきっと私を守ってくれる、私は無実だし、生きる権利がある。きっと法律が救ってくれる。」と言いました。つまり、生きることを救ってくれる、それは権利。権利ということはとても大事なことで、それを法律は守ってくれる。中学を出ただけのカーティスさんは 20 年間一所懸命に舍房のなかで法律を勉強したそうです。その勉強の成果で三度、再審の申し立てをしましたが、三度とも死刑判決を受けました。それでも希望を失わなかったのは、「自分には生きていられる権利があると思ったことだった。」と言っています。

しかし一方で、絶望したこともありました。一時期オクラホマは死刑の執行を停止しましたが、知事が替わって一挙に死刑の執行が進んだ時期があったそうです。そのとき、一人の同じく自分は無実だと主張しつづけた大切な友人が、死刑執行されたそうです。このとき、彼は絶望の淵に落とされました。人生で最も「自分も死にたい。死刑を早くしてほしい。」と思った。ここで、私はとても大事なことに気がつきます。自分をそばで支えてくれて自分と理解しあう人が一人でもいれば、自分は希望を持って生きられるということです。権利って、生きていくときにやっぱり大事なんだと思いました。最もシンプルです。一方、絶望というのは、支えてくれる大事な人を失ったときというふうに思います。まさに、希望と絶望というのは生きていくうえでとても大事なことだと思います。

今のお話のなかから、お互いを大切に思うこと、あるいは権利ということについて少し、話をしておきたいと思います。

お互いを大切に思うこと ・・・「権利」ってめんどくさそうだけど、 シンプル

レジュメに、権利ってめんどくさそうだけどシンプル、と書きました。ご紹介したように、カーティスさんは、生きようとい

う気持ちを支えてくれたのは、「それが権利だから」と言っていました。ただ、日本では「権利、権利」なんて使いますと疎ましく思われますね。国語辞典を調べると権利とは「権勢と利益」と書いてあります。権勢の権は権力の権、そして勢いと書いてある。「それは私の権利だ、僕の権利だ」なんて言うと歓迎されないことがよくあります。日常的な用語法のなかでは、権利はあまり大事にされていない、面倒くさいというふうに思われていますね。でもこの権利が、日本に定着するにはまだ歴史が浅かったようです。もともとは、明治の近代国家を作ろうとするときに、rights という英語が翻訳された言葉が「権理」でした。最初は「ことわり」、理科の理をあてていきますけれども。法律で秩序を作ろうとしたときに、あわてて翻訳された言葉はなかなか定着しないんだと思います。

でもこの rights という言葉をひもとくと、英語の語源辞典とか英英辞典とか調べると面白いことがわかります。この rights の語源には、「sure」という言葉があるんですね。sure というのは、お互いが話しているときに、うんうん、もっともだ、確かにそうだねと言ってお互いに納得しあう、あるいは、あなたの言うことはもっともだというときに、sure あるいは surely と使いますね。rights という言葉の語源が sure ということは、まさにお互いが対等で、お互いが尊重しあう、認め合う関係のなかで成立していた言葉が rights、そういう状況が rights という言葉の中に込められていることになります。つまり、権利と訳した rights は、お互いを尊重しあう、平たい関係性を持つことから出発していることがわかります。

まだまだ日本に権利が定着していませんが、権利はシンプルで大事なことだと思います。自分が相手を認めるためには、自分もしっかりしていなければいけません。自分を大切にしなければ相手も大切にできない。例えば、自分がなんとなくそわそわしているときには、相手にきちんと対応することはできません。自分がきちんと

しっかりしているときに、相手を尊重できる。自分がしっかりしていること、自分を受けとめている、あるいは、自分が自分であることをきちんと考えるチャンスを持つて、それはとても大事なことだと思います。相手を尊重するために自分を大切にすることが、まさに出発点だと思います。

私は、自分を大切にできなかった人たちをたくさん扱います。少年事件、非行、犯罪、自分を大切にできなかった人たちがさまざまな形で事件に登場します。その人たちの多くは自分を見失うだけではなく、半分、社会的自殺とも言われます。自暴自棄のなかで事件を起こす。そんな事件や刑事事件を私は学問として勉強していますけれども、そうした自分を見失った人たちの問題点が出発点なんだと思います。

マルセ太郎と Be 動詞の哲学

・・・自分をちゃんと受けとめる（アムへの自信）

自分を大切にすることについて、私は素敵な話をきいたことがあります。マルセ太郎さんという人がいます。年配の方でご存じの方がいると思います。ボードビリアン、芸人、パントマイマーとかいろんな形で言われますけれども、ものすごい形相をして、彫りの深い顔をした人です。在日朝鮮人二世の人です。大阪の猪飼野で生まれて、キム・キュンホンという本名を使うことなく、日本名・通名で幼小期を過ごし、高校を卒業して、自分を確かめるために、上京してさまざまな苦勞をしていきます。彼はよく言いました。「自分はいっぱい苦勞したとは思わない。でもたった一つだけ不安に思っていたことがある。オレって何者だろう？日本のなかにおいて、日本人じゃない。でもきっと韓国に渡って朝鮮に行ったとしても、自分はその人間として扱われないだろう。自分は一体どういうやつなんだ？才能もない、こうやって就職もない。とても不安だった。このとき、自分

に一番自信がなかった。」と言いました。

ちょうど中学校2年生ぐらいの子に、彼が講演で話していたことを、私が聞く機会がありました。とても印象的でした。

マルセ太郎さんは、中学生に向かって、「君たち英語を勉強するんだってね。いいねえ。オレも戦争が終わって最初に勉強したのが英語だった。これからは英語の時代だ。進駐軍も来るし、自分の未来も拓けるかもしれないと思って英語を勉強したけども全然だめだった。難しかった。」と言いました。彼は「Aくん、君は何かから英語を勉強した？」と訊くと、「え -、アイ・アム・ア・ボーイ、から勉強しました」と言います。「そうか、君はいったい誰なんだ？英語で言ってみろよ」「アイ・アム・ササキ？」と言います。「お前は、アイ・アム・ササキなんだな。じゃあ、そのアムってなんだ？」と言うと、その子は「ササキ・・・です。です。です。」と答えます。でも、「本当にアムとかイズは「です」なのか？」と訊くと、その子は困っちゃった。「それって Be 動詞っていうんだろ？ユ -、アーって使うだろ。アムになったりアーになったり、イズになったり、いろんな変化をする。この Be 動詞、君たちにとっては大事なんだ。私はササキです、と言ったら、ササキそのものだろう。お前そのものだろう？そうだよ、Be 動詞ってというのは、君自身なんだよ。この言葉がなきゃ、君は君でなくなる。」と言っていました。

とても大事なことだと思います。Be 動詞ってというのは、自分を確かめるために大事な言葉なんだと、彼は一所懸命子どもたちに伝えます。「Be 動詞は、そこにあること、いることだ。存在そのものなんだ。この存在そのものは、まさに、生きてることだ。お前は今生きて、オレとしゃべっているだろう？生きてること、存在することだ。それが Be 動詞がなきゃ、生きてることにならない。存在していることにならないんだ。」と言いました。彼は、生きるということ、"To be or not to be." というシェイクスピアの話を紹介します。「"to be" とは、生きること、Be 動詞はそ

ここにいることだ。存在だろう？」と話をしていた。とても素敵なおメッセージだと思いました。

「自分を大事にする人間は、少し自分に自信を持てる。自分を大切にしろ。オレはそれをいっぱい見失ってきた。やはり生きるためには自信を持つことが大事だ。でも自信を持つということは、他人よりも誰々くんよりも僕はうまくできる自信があるだとか、そんな自信なんかいらんないんだ。人と比べて優越感に立ったり、比べて秀でていないものは劣等感を持ったり。自信っていうのは比べて生まれるものじゃあないんだ。お前がお前であればそれでいい。自分が大事にできる子は少し自信が持てる。」と言いました。

自信っていうのは、競争や優越、さまざまな比較のなかで生まれるのではなく、その子にきちんと大事に寄り添ったときに、少し自信が生まれるものなのだと思います。「アイ・アム誰々、私は居るんだ、私は存在する。ユー・アー、あなたは存在する。ヒー・イズ、シー・イズ。彼は、彼女は存在する。十分、それで十分だ。」そういう話を、彼は中学校2年生にしました。自分を見失いつつも、ボードビリアンとして注目されていった在日朝鮮人の彼の言葉として、とても重い言葉なのだろうと思いました。

自分を確かめる出発点を持てると、少しずつ自信がわいてくるという気がいたします。子どもと向き合うときの、大切な出発点というのは、子どもが自分を大切にできる、実は、権利という言葉が持つ「互いに尊重しあうこと」が出发点だと思います。

the best interests of the child (子どもの権利条約第3条、三重県子ども条例第三条)

じゃあ子どもの権利って何だろうか？ということのを改めて考えてみることも大事です。

子どもの権利については、「子どもの権

利条約」、国際的な条約があります。子どもを子どもとして大事にしようよ、子どもだからということじゃなくて、子どもを一人の人間として大事にしようよ、という国際的な取組があります。これが子どもの権利条約というものです。この第3条にこう書いてあります。英語が原文ですけれども、the best interests of the child と書いてあります。

実はこの翻訳は、三重の子ども条例にもあるんです。子ども条例の第三条のところにも書いてあるんです。法律家など大人は「子どもの最善の利益」と訳しています。政府訳も「子どもの最善の利益」と訳しています。

最善の利益って何だろう？と疑問がわくかもしれませんが、もともと interest という言葉の語源は、inter と esse。何かをつなぐとか、真ん中にあるとかという意味です。かつて国際性ということ international とよく言いました。national、ひとつの国や民族をつないでいくというのが international。この inter、真ん中にある・つなぐという意味と、esse は、ラテン語の辞典を調べてみると英語が付けてあって、to be と書いてあるんですよ。to be or not to be の to be。生きること、存在ということなのです。つまり、子どもの真ん中にある、最も大事なこと、ということがわかります。

子どもの存在の中で、最も大事なこと、真ん中にあるものを大切にしましょう。子どもの真ん中にあるものって、いったい何だろう？それを知ろうとすることが大事だということになります。子どもの権利って最初からあることではなくて、子どもが自分の真ん中に持っているものを知ろうと近づく大人がとても大事なのだよと、この言葉は示していることになります。the best interests of the child は、子どもの権利の抽象的な概念ではなく、大人が近寄っていく、そのことの大切さを示しているというふうに思います。その大切なことをめぐって、太田明さんという教育学者が the best interests of the child を「そ

の子その子の興味関心」と言いました。この興味関心ということについては、私がこの条約の紹介を中学校でしたときに、「interest を何て訳す？」と訊いたら、子どもが興味関心と訳すんですね。最も有名な教育学者である太田さんが訳した「興味関心」と同じ訳をした。このことはとても大事なことだと思います。その子その子のニーズをきちんと探ること、そうして近づくことを大人に求めているということになります。近づくときに、どんな近づき方をするのが、大人によってさまざまということになるかと思っています。

子ども期というのは、失敗しながら成長していくプロセスなんだと思います。もう一つは、大人になっていくプロセス、つまり、社会に少しずつ踏み出していくプロセスです。大人になったからといって、大人だという確証はありません。大人の社会との関わりのなかで、大人性をきちんと学び取っていくのだと思います。最もトレーニングの場にあるのが子ども期です。驚き、とまどいつつ、自分を受けとめ、そして少しずつ人間への信頼を作っていく。これは社会的トレーニングだと思います。この人は自分を信用してくれるかな、少しずつ他者や外の世界と結びあっていく。この信頼のきっかけをきちんと作っていくプロセスが、まさに子ども期に必要なことだと思います。ちょっとずつ子どもは外に出ようとしていたり、あるいは思い切って外にでて失敗することもあります。

学問の世界では、子どもが成長していくということ、子どもの成長発達圏という言葉で表現します。人と人との関わりで信頼のきっかけを作っていくこと、これを人間関係形成圏といいます。この二つは、子どもの権利にとってとても大事なことだと言われています。成長発達圏、人間関係形成圏なんて難しい言葉を使わなくても、子どもは自分でそれを実験しているんだろうと思います。少しずつ自分が成長していくプロセスをどうやって実感できるか、大人との関わりのなかでつくっていく。勉

強の中でつくっていく。少し勉強が出来た。「ああ、やったあ。」これも成長なんだと思います。でもそれを「よくがんばったね。」褒めてもらおうと、もっと「やったあ。」と思う。つまりこうして自分が少しずつ自分の気持ちに自信を持っていくプロセスを保証していくことが、とても大事なんだという気がいたします。

「対話」の関係作り

・・・「声を聞く、聴く」ということ

最後ですけれども、声を聴くあるいは言葉を聞くということはとても大事なんだと思います。言葉というのは、病気をしているときにはふにゃふにゃしたり、元気が良いときは強く言ってみたりさまざまです。よく教科書などをテキストと言いますね。つまり言葉をまとめたものがテキストで、もともと言葉はさまざまな形でいろんな意味合いを持っていたりいろんな伝わり方をします。テキストチャーという言葉もあります。肌合いとか、触れた感覚、言葉を織ったもの、それが言葉の伝わりかたという意味になります。織物、布の織物、テキスタイルという言葉もあります。人間が作り出したものをいろんな形で織り合わせていくというものが織物と言われます。これは人間の言葉も同じで、さまざまな形で受けとめ方ができるということになります。時にはわからない表現を使ってみたり、乱暴な言葉だったり、言葉にならなかつたり、いろんなことが起きます。

こうしたなかで、受けとめるのに大切なことがあります。この「言葉を聴く」という姿勢について、あるときとても大事な言葉に出くわしました。ドイツ語で、「フュアヌフ (Vernunft)」という言葉があります。冷静であること、理性的であることという言葉です。このフュアヌフの動詞形は「フェアネーメン (vernehmen)」、「聴く」という動詞なのです。「聴く」という動詞をもとにして、「理性、冷静な姿勢」という言葉がうまれます。

つまり、言葉を聴くとき、声を聴くとき、人々は冷静で理性的に聴くというところから始めることが大切だということがわかります。まさに私たちの関わりの方針は、「聴く」という姿勢を大事にすること。その「聴く」という姿勢は自分を落ち着かせ、そして冷静な自分を取り戻しつつ、子どもの声を聴くということになります。このことは、大人と子どもの関係づくりのなかでとても大事だと思います。

言葉にならなくても、目線で交わすときもあります。私もこうやって私の話をしているときに、うんうんと言ってくれる人をついつい見てしまいます。安心して、これでいいよね、とついついその人の顔を見ちゃいます。これって人間の関わりの出発点かもしれません。ぷいっとそっぽを向かれていますと、あれ？話のどこかが変かなと心がざわめいてしまう。心がざわつくときに、きちんと向き合ってもらおうと、うなづくこと一つで安心して話せるときがあります。受けとめる姿勢がとても大事なんだと思います。

子どももおとなも、ともにいまを「いきる」・・・みえの子ども白書から互いを考えあう

子ども白書のなかには、私たち大人が改めて考えてみるのがたくさん盛られています。子どもの実情についても書かれています。改めてこの数字を親と子が、大人と子どもが、教師と生徒が、一緒になって見てみるという関わり方があってもいいのかなと思います。

最後に、私の大好きな本を紹介させてください。谷川俊太郎さんが「生きる」という詩を書いていますけれど、子どもにとっても大人にとっても、to be or not to beまさに Be 動詞、生きるということ、存在を大事にしたメッセージがここにあると思いましたので、ちょっと長いけど紹介させてください。

生きる

谷川俊太郎

生きているということ
いま生きているということ
それはのどがかわくということ
木漏れ日がまぶしいということ
ふっと或るメロディを思い出すということ
くしゃみをする事
あなたと手をつなぐこと

生きているということ
いま生きているということ
それはミニスカート
それはプラネタリウム
それはヨハン・シュトラウス
それはピカソ
それはアルプス
すべて美しいものに出会うということ
そしてかくされた悪を注意深くこぼむこと

生きているということ
いま生きているということ
泣けるということ
笑えるということ
怒れるということ
自由ということ

生きているということ
いま生きているということ
いま遠くで犬が吠えるということ
いま地球が廻っているということ
いまどこかで産声があがるということ
いまどこかで兵士が傷つくということ
いまぶらんこがゆれているということ
いまいまがすぎていくこと

生きているということ
いま生きているということ
鳥ははばたくということ
海はとどろくということ
かたつむりははうということ
人は愛するということ
あなたの手のぬくみ
いのちということ

この詩は、何気ない日常をずっと綴っています。でも大事なことを気付かせてくれます。自分たちが生きているまわりの人たちに気付くこと。自分が生きている地域の自然に気が付くこと。そして最後に、彼は、生きるということの最後のところで、「あなたの手のぬくもり、温み」と表現しています。いろんな何気ない日常を気にしながらも、手のぬくもりを感じる、近くに信頼する、支えてくれる人がいること。とても大事なことを、この生きるという詩から学びとることができます。

私は改めて、みえの子ども白書の中から、さまざまなことを学び取れるチャンスを、子どもたちと、大人の仲間たちとともに、学び取るチャンスをつくれればというふうに思っています。ご静聴いただきまして、どうもありがとうございました。

